

高砂市民病院の1階ロビーにある地域連携室。カウンセラー越しに、初老の男性がのぞき込んだ。

「来たわね」。看護師の橋本みさ子(40)は、笑顔で応じた。中庭を望む休憩席に男性を案内し、その話に耳を傾けた。

男性は10日ほど前、末期がんの告知を受けた。その日、面談した橋本は「お前に何が分かる」と怒鳴られた。めげることなく「きつと必要になるから、また来ますね」と声をかけた。

橋本は、1カ月に約100人の患者らと面談する。患者に人生を振り返ってもらう。「どうすれば、この人らしく生きられるか」を探る。時に患者の決断を促し、希望を見つける作業に寄り添う。「生き続けたいと願う気持ちを素直に受け止めるだけ」と静かに話す。

橋本は、病院初の認定看護師だ。がん患者やその家族の身体的、精神的苦痛を和らげる「緩和ケア」を専

# 再生の処方箋

報告・高砂市民病院

3

## 挑戦後押しし 士気高まる



患者の話に耳を傾ける認定看護師の橋本みさ子＝高砂市荒井町紙町

しかし、認定看護師になるには病院を離れ、長期の研究を受ける必要がある。経営状況はとんだ底だったが、院長の大野徹(60)は、橋本の熱意に心え「行ってきなさい」と背中を押した。挑戦を認めることが、やる気と自信につながり、病院全体の士気を高めた。

門とし、2008年、日本看護協会の認定を受けた。このところ高砂市民病院で、認定看護師を目指す動きが活発化している。

明石で入院していた友人が電話で声を振り絞った。見舞いをして、病床で痛みにもたえ苦しむ姿に言葉を失った。疲れ切った家族は、緩和ケア病棟のある神戸の病院への転院を選んだ。すると、友人に笑顔が戻り、手紙のやりとりもできるようになった。

03年から橋本ら看護師の有志が勉強会を開いた。06年には医師とともに緩和ケアチームも発足したが、兼務では限界があった。専門知識を持ち、状況に応じて

橋本が緩和ケアを目指したきっかけは、友人のがん闘病だった。

「助けて」。高砂で勤め始めて間もない10年前、亡くなる前には、母親と北

### 認定看護師

すぐかかわれる人材が必要だった。

敬称略 (増井哲夫)

橋本に続き、今年は一皮膚・排せつケア」の認定看護師が誕生した。さらに、昨年の新型インフルエンザ集団感染で初期診療を担った看護師ら2人が「感染管理」の認定を目指し、神戸で研修を受けている。「病院へ希望を求めて訪れる患者に、私たちは何ができるのか」。橋本らの思いは、病院再建の原動力となっている。